

令和4年度認定 (No.95)

農業名人

なめこ栽培名人 ^{ももざわ} 桃澤 ^{たかお} 孝夫

昭和25年生まれ 飯島町在住

「自分達が食べて一番おいしい

いもの売りたい」



生家は水稲を中心とした専業農家で、養蚕や米の刈り取りが終わると、冬場は建設現場へ働きに行き生計を立てていた。昭和49年に、冬場の生計を立てて行くうえで、養蚕の施設を使ってなめこ栽培ができないかと家族で考え、養蚕を行っている周りの農家に相談したが、「なめこの菌と蚕の雑菌が影響を受けあって、うまくいくはずがない」と気にも留めてもらえなかった。

しかし、自分の考えを信じ試したところ、1年目でなめこ栽培に成功。アイデアを一笑に付していた町内の養蚕農家は、なめこの季節栽培を始め、栽培農家は約300軒にも拡大し、町内だけでなく上伊那では500軒ほどの農家にまで栽培は広がった。

なめこの栽培を始めて5年後には、ブナシメジの生産に切り替え、年間生産量約30トン、全国生産の1%を担うまでになった。

同じころ、伊南地区を中心に施設利用組合によるブナシメジの栽培拡大がスタートし、生産も順調に伸びていった。

生産も安定し、売り上げも増えてきたため、農事組合法人越百農産を設立し、ブナシメジの年間生産量は約300トンに及んでいた。

平成4年には有限会社越百農産を設立し、なめこの生産を再開し、ブナシメジとなめこを併用した生産を始め、やがてなめこ専業になった。

平成23年の東日本大震災後、ブナシメジの施設や設備を使った株なめこの栽培に切り替え、現在では飯島町内3ヶ所の栽培拠点を持ち、年間1,800tを出荷しており、



出荷量としては県内では1位、全国の8%を有限会社越百農産がシェアしている。株なめこは「自分達が食べて一番おいしいものを売りたい」というきのこ生産者にとって原点に返った発想から生まれたものだが、「より良いものをより安く、これが物を作る者の立ち位置だとの信念を持ち、働いてくださる従業員の皆さまあつての越百農産であり続けたい。」と語る。